

## 性に関する指導支援について

### —性に関する指導支援を考える研究グループの活動を通して—

和歌山大学：林 修（研究代表者）、本山貢、今村律子、矢野勝  
藤田絵理子（附属三校教育相談コーディネーター）  
和歌山大学教育学部附属特別支援学校：一ツ田啓之、鶴岡尚子

#### 1. はじめに

本研究グループは、附属特別支援学校の取り組みである「サブ・ケアシステムの会」<sup>1)</sup>を発端として、平成29年度に設立された研究グループである。毎回、和歌山大学教員や附属学校教員、関係機関の職員が集い、各学校や関係機関における実践事例の情報交換を行うことで、性に関して、よりよい指導支援の在り方を考えることを目的として、協議会を開催している。これまでの活動の中で、特に「子どもたちに正しい性知識を教える性教育が必要」、「性教育プログラムに加え、生活の中でのアプローチも大切」、「家庭や地域環境が大切」、「スマホ（有害な情報を得たり、被害にあったりする）が性の問題にも大きな影響力となっている」等が確認されている。

#### 2. 今年度の取り組み

##### (1) 書籍の発刊

協議や情報交換の中で、各連携機関の専門性を生かしながら「性被害も性加害もなくするための性教育の知識の整理が必要である」ことが一層課題として鮮明になり、和歌山県精神保健福祉センター所長である小野善郎精神科医師の監修のもと、2019年7月に書籍『児童青年の発達と「性」の問題への理解と支援 ～自分らしく生きるために 包括的支援モデルによる性教育の実践～』を発刊するに至った。

書籍発刊には、和歌山県内の総勢63人の方からの協力を得ている。この書籍では、和歌山県内の幼児、児童・生徒、青年の「性」に関する課題への支援を行う行政機関（和歌山県警察、男女共同参画課、健康推進課などを含む医療、保健、教育、福祉、司法）、NPO、個人等の協力の下、施設訪問や聞き取り調査を行った結果も報告している。さらに、地域包括的支援モデルの実現に向けて、それぞれの支援機関の特徴を生かした指導・支援の実践について、教科書のように一冊で学べるよう、年齢や発達の課題を考慮した性教育の必要性、伝えたい性知識等についてまとめた。

調査を始めた頃は、和歌山県内において「性」に関する指導・支援を行う専門機関や専門職が、どのような活動や支援を行っているのか全体像を捉えきることができていなかった。しかし、研究を進めていく中で、さまざまな機関や専門職が多様な支援を展開しているとともに、学校現場においては、性に関する多様な問題や課題が顕在化してきていることが明らかになってきた。また、児童養護施設等の社会的養護関係施設においては、入所児童間の性的問題が多数報告されてきていると共に、性被害や性加害、被虐待を理由とする入所児童が増加しており、年齢や発達、生育歴、生活環境等を考慮した適切な性（人権）教育が喫緊の課題であると共通認識された。

これらに関する成果として、以下の3点が挙げられる。

- ①一地方都市による地域包括的性教育モデルの一例を提示することができた。
- ②性の問題に関する指導・支援の実践や社会資源一覧、ガイドブックともいえる書籍の完成は、多機関・多職種による学際的支援・研究の賜物であり、県内の連携・協働システム整備の第一歩となった。
- ③包括的性教育プログラムの構築には、学際融合的システムが必須となる。これまで築き上げてきた連携・協働システムにより、ユネスコのガイダンスの基準を満たした「和歌山モデル」としての包括的性教育プログラム（幼児～思春期・青年期までの縦断的、系統的なプログラム）の構築に向け

た「顔の見える関係づくり」の一助となった。

## (2) シンポジウムでの実践発表

書籍発刊と関連し、令和元年度和歌山県精神保健福祉センター主催の思春期セミナーにおいて、本研究グループのワーキンググループメンバーが実践発表を行った。

日時 令和元年7月25日(木) 13時30分～15時30分

会場 県民交流プラザ和歌山ビッグ愛 2階 201会議室

対象 精神保健福祉従事者、学校教育関係者、子どもの支援に関心のある方

内容 シンポジウム「よりよく生きる」ための性に関する指導・支援

- 1) 和歌山大学と附属学校を中心とした性教育の指導・支援の実践 藤田絵理子(和歌山大学教育学部)
- 2) 発達段階を見通した幼児期からの性教育 森下順子(和歌山信愛大学教育学部)
- 3) 児童自立支援施設における性的問題行動のある児童への支援 岩田智和(和歌山県仙浜学園)
- 4) 和歌山大学附属特別支援学校における性教育実践 鶴岡尚子(和歌山大学教育学部附属特別支援学校)  
コーディネータ 小野善郎(和歌山県精神保健福祉センター)

主催者側の集計結果によると58名の参加があり、アンケート回答者数は56名(回答率96.6%)とのことである。また、アンケート中の自由記述における『性教育=人権教育』と聞き、目からウロコでした。この言葉を聞いただけでも今日の研修に参加した価値があった!と思いました。」「多面的に性について考える機会をいただきました。教育場面でできること、もう少し枠を広げて考えたいと思いました。」という記述からは、参加者の性教育の包括性への気付きが読み取れる。また、「もう少し具体的な支援を知りたかった。」「次回は事例検討(性問題)などを実施してほしい。」「LGBTQのような性への理解には特に関心があります。今まで水面下で見過ごしていたのかなという思いがあるので。これからも継続して思春期保健、性に関する指導・支援の研修をお願いします。」といった、今回の発表内容に関する課題の指摘や、今後の開催テーマについての要望も散見された。これらは、目の前の性問題に対応できる、即実践可能な具体的な支援方法を知りたいと望む参加者が少なくないことから、今後の実践発表の機会に活かしていきたい重要な意見である。さらに、「和歌山モデル」による性教育で「指導委員会が変わり、学校で性教育が進めやすくなったり、進めることが義務となったりすればうれしいです。」との記述からは、性教育の必要性を感じつつも、学校現場で性教育実践を進めるに当たっての困難が読み取れる。

学校現場に限らず、人のライフステージのあらゆる段階、あらゆる場での性教育が可能となることを理想とし、その実践者となる人を増やしていくことを本研究グループによる講演活動の目的としたい。

## 3. まとめ

現在、ユネスコの『国際セクシュアリティ教育ガイダンス』の基準を満たした包括的性教育プログラム(「和歌山モデル」)の構築に向けた研究を開始している。その第一歩として、大学生に対する調査研究を行うための準備中である。

今後和歌山県内で、関係機関との連携を尊重し、性に関する系統的な教育の整備の促進を目指し、「人権意識に基づいた包括的性教育の充実」を目指していきたい。

### 1) 「サブ・ケアシステムの会」とは

和歌山大学教育学部附属特別支援学校において連携している教育・医療・療育・保健・行政等各機関のそれぞれが有しているケアシステムを組み合わせ活用し、地域連携の橋渡しをしていくことができるのではないだろうかという仮説を立て、実践を行ってきた。このそれぞれのケアシステムをつないでいく取り組みを「サブ・ケアシステム」と称している。

(文責: 鶴岡尚子)